

『M.エヴァの犬』 - A章風

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

ワンステップ、ツーステップ
 天に羽撃たこう
 大好きなレコードをかけて
 失敗しないように慎重に
 ワンステップ、ツーステップ
 天に羽撃たこう
 もう迷わないように本を持って
 皆が驚くぐらい大胆に
 ワンステップ、ツーステップ
 さあ、天に羽撃たこう
 神が私を救ってくれるのを願って
 空飛ぶ豚が気付かないうちに
 ワンステップ、ツーステップ

大きな音を立てて椅子が倒れる

彼が急にその動きを止めたのは私がカーラチオから流れてくる音楽について考えている時だった。その音楽がバッハのブランデンブルグ協奏曲であることは間違いないのだが、私はそれが第何番にあたるのかをどうしても思い出すことができなかった。後少しで思い出せる、そんな気がした。しかし、肝心のカーラチオも彼が動きを止めるのと同時に音楽を流すことを止めてしまった。

彼はすでにかなりの年で、こうして機嫌を悪くして己の職務を放棄してしまうことも珍しいことではない。普段は暫く機嫌を取ってやれば又、職務を果たしてくれるのだが、今日はなぜか何時までたっても彼は機嫌を直してくれることはなかった。

私はこの気難しい老人の態度に激しい怒りを覚えた。このままではあのブランデンブルグ協奏曲が第何番なのか分からない、そう思うともう我慢することはできなかった。私は彼に向かって思い付く限り悪口雑言を言うと彼をおもいきり蹴飛ばした。しかし、年の割に頑丈な彼はよろめきもせず、反って私のほうがよろめいてしまった。私は足に走る痛みを堪えて立ち上がると彼を一睨みし、自分の鞆だけ持つと彼の元を離れる事にした。

五十メートル程歩いたところにバスの停留所があった。そこには一人の初老の男が居た。その男は己のものと思われる大きな旅行カバンに腰を下ろし、私の方をじっと眺めている。私の目とその男の目が合うと、その男の瞳に写る私自身の姿が見えた。その姿は次第に姿を変える、そうあれは、あれはピカソだ。頭の中ではまだバッハのブランデンブルグ協奏曲が鳴り響いている。ピカソはニタニタと笑いながら自分の耳に、いや私の、私の耳に剃刀をむける。ブランデンブルグ協奏曲が第何番か分からないブランデンブルグ協奏曲が鳴り響く中でピカソは私の耳を削ぎ落とす。私がおもわず口から悲鳴をこぼしそうになったときだった、その男が私に話しかけてきたのは、

「故障ですか？」

いつの間にかピカソは居なくなっていた。

先程の私と彼のやり取りも見ていたのであろうか、男が続ける。

「ついていませんね、今この町には自動車を修理できる者は一人もおらんのですよ。いや、普段は一人いるのですがね、先週、倒れてしまいまして、ネーデにいつてしまったのですよ」

男は柔和な笑みを浮かべながらそう言った。あまり好きになれそうにない男だ、私はなぜか男にそんな印象を持った。

私は男に先程の場所に全く同じ姿勢で佇んでいる彼、私の古ぼけた愛車、のほうを指差しながらこの町に自動車屋がないかどうかを尋ねた。

「残念ですがこの町にはありませんよ。隣町まで行けばあるでしょうがそこまで歩いていくのは無理ですからね」

男の返事を聞いている途中でふと気が付いた。頭の中で鳴り響いていた音楽が止まっている。いけないこれでは第何番かが本当に分からなくなってしまう、そう思った私は必死で旋律を思い出そうとした。だが、なぜかどれだけ思い出そうとしても旋律が思い出すことができない。あの協奏曲の旋律が……？ あの？ 私は愕然とした。協奏曲の名前が思い出せなくなっていたのである。私はこれほど記憶力が悪かったのだろうか？

「あ、そう深刻に考えんでも大丈夫ですよ。あと一時間もすればネーデに行くバスが来ますからね」

何か勘違いしたのか男がそんな事を言っている。幸いな事にネーデが私の目的地だった。一時間程なら待つのもそう苦痛では無いだろうと判断した私はその男に適当に返事を返すと、地面に腰を下ろした。服が汚れる事よりもあの協奏曲の事が気に掛って仕方なかった。バッハの協奏曲だ、思い出せないはずはない。クリスマス協奏曲だったろうか？ いや、あれはヴィヴァルディだ。バッハだ、バッハ、J. S. バッハ。

「まあ、考えようによってはついてますよ。ここは一日に一本しかネーデ行きのバスはありませんからね。主に感謝するべきでしょうね」

男はまだしゃべり続けている。喧しい男である。人が考え事をしている時に話をするな。何が、主に感謝するべきでしょうね、だ。くだらない。何故私が主に感謝などをせねばならないのだ。

「何を言われるか。あなたの乗り物が壊れた時に目的地へのバスがまだある。主に感謝するにはこれだけで十分、何故それをくだらないなどと言われるのかね？」

こんな事を聞くなど、この男は本当にくだらない。それは、私が必要さを認めないからに決まっているではないか。

男が口を噤む。

さて、私は何を考えていたのだったか？ あれは、あれは……そう、バッハだ。バッハについて考えていたのだった。バッハ、大バッハよ何故だ。あれほどまでに鮮烈な幾何学を完成させながら、何故カウンタータから脱することができなかったのだ。

「なるほど、つまりあなたは無神論者ということだね」

男が静かにしていたのは束の間のことであった。

全くこの男は何を聞いていたのであろうか。私がいつ無神論者だなどと言ったと言うのだ。私はその必要性を求めないと言ったのだ。

男が怪訝な顔をする。

「すまないがもう少し分かりやすく説明してくれないかね」

何という男であろう。それ程までに私の思索を中断したいというのか。神の存在を信じることと人生の中の些細な幸運を神に感謝する必要性を感じる事が異なっている事など自明のことだ。

「失礼だが、それはいささか傲慢な考え方ではないかね。マタイ福音書にもこうある。自分の命の事で……」

止めろ！ 思わず私はそう叫びたくなった。聖書の言葉を使わずに、自分の言葉で話せ、そんな考えが頭をよぎる。神の言葉ならまだしも、人の言葉ごときに従うとは真に愚かな男だ。

「なんという事を言うのかね。かのパウロもピリピ人への手紙で……」

自分の言葉で話せと言ったではないか。この男は他人の言葉でしか自分の考えを述べられないのだろうか？

「む、確かにあなたの言う通り他人の言葉を使って自分の考えを語ろうとするのは間違っているのかもしれない。だがね、神の言葉である聖書の言葉を例に挙げて真理を

説明しようとする事は間違っていないのではないかね。先程あなたは神の存在を認めると言われた。神の存在を認めながら神の言葉である聖書を否定するというのは矛盾した行為ではないかね」

私は何故自分が初めにこの男の事を好きになれなさそうだと感じたのかを理解した。この男は、この薄汚い豚野郎は聖書至上主義者なのだ。聖書至上主義者、教会の真の価値も分からず、聖書の真の意味も分からぬままにただ聖書を絶対視し、世間に誤った教えを広めようとする狂信者。

「私が聖書の真の意味を理解していないとは、聞き捨てならない言葉だね。私は聖書をすみからすみまで読み尽くし、そこに書かれた言葉が我々の従うべき神の言葉であり、唯一の真理であることを理解した。私のことを良く知りもせずとその様な事を言うのは止めてくれませんか」

男は相変わらず作り物じみた笑顔のままで心成か怒気を含んだ口調で話し続ける。「良く分かっていないようなのであなたに聖書が何であるかを簡潔に説明しましょう。

人が神に従い清く正しく生き、神がその人々を祝福するテストメント（契約）。キリストを神の子と信ずるものを神が救済するテストメント。聖書とはこの二つのテストメントを保証し、このテストメントを守るために我々が従うべき真理である神の言葉の記された書籍である。

あなたは私のことを『聖書の真の意味も分からぬままにただ聖書を絶対視し、世間に誤った教えを広めようとする狂信者』と評されたがこれでもまだ私が聖書の真の意味を解さぬ者だと言うのかね」

ああ、やはりこの男は不浄な豚だ。私は深く嘆息した。聖書をすみからすみまで読み尽くしてこのような浅薄な理解にしか辿り着くことができないとは。私は一瞬この男にたいして同情すら覚えたがすぐにそれを打ち消した。浅薄なだけならまだ許せる。それはこの男の理解力の低さに起因することだからだ。だが、先程この、この豚は、人が神に従い清く正しく生き、神がその人々を祝福するテストメント（契約）、と言っていたのではないか。何たる傲慢だろうか。私には浅薄さは許せても傲慢さは許すことはできなかった。

人と神が契約する。これは傲慢な考え方である。なぜならば人が神に従い清く正しく生きた時に神はその人を祝福せねばならない事になるからだ。神が人の行動によって動かされるようなことはあってはならないことだ。神は人の生き方などに行動を束縛されることはないのだ。

聖書は神の言葉などでは無く人の編纂した書物にすぎない。ナザレのイエスが述べた神の国の到来、言い換えるのであるならば神による一方的な人々の救済を人々に伝え、そのことを確信させるための道具にすぎない。

確かに聖書の中には様々な神との関係のありかたが記されている。だがそれらの記された真の理由はやはり人が自身の勝手な善悪の基準で神の行動を束縛するような事を防ぐためだったはずではないか。

「なるほど、あなたはなかなか面白い考えをお持ちだ」

男はもう笑っていない。

「先程よく分かっていないなどと言ったのは訂正しましょう。あなたの仰ることはどうしてなかなか理性的です。しかしながら、余りに理性的過ぎているのではありませんかね」 私は動悸を感じた。体が急に冷えていくのが分かる。この男の言おうとしている事は分る。それは、私自身が敢えて触れぬようにしてきた虫だ。

「あなたの仰られたように人が自身の勝手な善悪の基準で神の行動を束縛する事は大きな誤りででしょう。ではなぜ人はそのような誤りに陥ってしまうのか？ それは人に理性、言い換えるならば知恵が存在してしまうからではないですかね」

氷像と化した肉体の中から時計の音が聞こえてくる。時計の狂ったリズムが聞こえてくる。眠っていた虫がリズムを狂わしているのだ。

そう、知恵である。私が聖書を理解したのは私の知恵によってである。だが、私は、いや私たちはどの様にして知恵を手にしたのだっただろうか？ 木の実だ。エデンの園の知恵の木の实によってではないか。

「知恵は我らの祖が犯した大罪によって得たもの」

男の言葉が新たな虫となり私の肉体を蝕んでいく。

「不信者は信仰に理由を求める。まるで自分が神にでもなったかのように知恵、理性で神の言葉、預言を切り刻みながらそこに理由を探す。そして、まるであなたのように預言を否定する。しかし、これは誤った行為だと思わんかね。

そもそも真理とは唯一のもの。そして神は預言者に言葉を託された。

これが何を示すかは分るね。理性による考えと預言の内容が対立する時、理性によるものは確実に誤っているということだよ。なぜならば人は誤りを犯すが神は決して誤りを犯さないからだ」

何か違う、そう違うはずだ。何かが。

ああそうか、神は世界を作りたもうた。ならば何故この世界に我々がいるのだろう。神は我々を救われる。何からだ？ この世界からだ。我々は罪を背負っている、だが罪とは何であろうか？ 神は分け隔てをしたりしない。神の前で万人は平等である。罪人も聖人も平等に救われるはずだ。では我々の罪とは意味のないものではないだろうか。少なくとも我々の定義する罪は罪ではない。何が罪であり何が罪でないのかは神のみが知る事なのだろう。

思考が脳を溶かしていくようだ。壊れた時計の狂ったリズムを心地好く感じる。その狂ったリズムがゆっくりゆっくりと一つの旋律になっていく。マタイ受難曲。J. S. バッハのマタイ受難曲だ。旋律が私の骨を揺さぶる。

「もしも、あなたの言う通り聖書が神の言葉でないなどしたら、我々のように聖者でもなんでもない凡人は一体どのように神の支配を受け入れれば良いのか分らなくなってしまうのではないかね。我々の大部分は神からの直接の導きを受けることはできない。だが、神は我々を救って下さる。預言によってね。つまり、聖書はあなたが仰られたように人の書いたものであるがその内容は神が我々を救うために人に預けた言葉なのではないかね」 ドロドロのスープのようになった脳を掻き集めると思考が溢れ出してくる。溢れでた思考はバッハの旋律と混ざりあい私の迷宮の出口への道標となる。

神の支配への態度など何も問題にすることはない。何故ならば神は分け隔てをしないのだから。しかし、我々は常に何が正しく何が間違っているのかを知りたがる。そして教会が作られたのである。

溶けた脳が歪な形で固まっていく。

教会は、変わり行く我々の現実社会内の秩序を維持するための装置であり、ギリシヤのアリストテレス哲学、プラトン哲学の手法を取り入れ神の支配を世界に敷衍する機関である。この宗教はナザレのイエスが作ったのではなく、教会が作ったのだ。で、あるとするのならば彼等が聖典とした聖書もある程度の権威あるものとして扱わなければならないのかもしれない。教会と同じく人が各々の善悪の基準に沿って神を束縛することを防ぎ社会に一定の秩序を保つための装置として。

マタイ受難曲の壮麗な旋律が私の精神を安定させる。朗誦が頭蓋の中で反響し、私をしばしの恍惚に浸らせてくれた。

「教会だと！ 下らん。なぜ分からんのだね。教会こそが世界に神の支配ではなく神の名を借りた人の支配をもたらした元凶なのだよ。教会のしているのは神の支配の告知などではなく、自分たちによる支配の告知ではないかね」

朗誦が唐突に雑音に変わる。それは私の歪な形をした脳を激しく引き割く。傷口に男の嘲りが突き刺さる。どうか、それ以上私の醜い部分を見ないでくれ。どうか、それ以上私の醜い部分を見ないでくれ。どうか、それ以上私の醜い部分を見せないでくれ。

ひどい雑音で朦朧とする意識の中で私は思う。私はまるで豚のようだ。私は豚か？ 豚はあの男のはずだ。そう、あの男は豚のはずだ。豚の言う事はちっとも分からない。そう、分からないのだ。分からないのに豚はいつもベチャクチャベチャクチャと雑音を出すのだ。豚はちっとも分からない。分からない、分からない、分からない、分からない、分からない、分からない、分からない……。

気が付くと目の前に絞首台があった。私はゆっくりとその階段をのぼる。階段は果てしなく続いている。目に映っているのは絞首台の輪奈結びにされた縄だけだった。もっともっと高く昇らなくてははいけない。十分も二十分も苦しんで死ぬのは嫌だった。一瞬で全てを終わりにしたかった。鼠が喚くように段が軋む。

あれからどれくらい段を昇っただろう。階段の終わりはまだ見えない。階段の段と段の間から向こう側を覗いてみた。そこには私が吊されていた。私は振子の ようにゆらゆら揺れながら私を見て笑っている。まるで絡繰り人形のようにぎこちない動きで首を傾けて笑っている。馬鹿だね、お前は本当に馬鹿だねと笑っている。裁判がまだだろうと笑っている。ああ、まだ裁判をうけていないではないか。そう気付いた次の瞬間に私を吊していた縄が音もなく切れた。私はまるでサタンが地に投げ落とされたときのように墓穴の底に落ちていった。

法廷の中は豚であふれかえっていた。豚たちは凶々しくも人間の服を着ている。偉そうに鬘を被り判事の席に座った大きな豚。モーニングを着て落ち着いたなさに私に隣の隣をうろうろしている真っ黒な豚。それとは対照的な衛兵の制服に身を包んだ二匹の白豚。そして様々な衣装の傍聴席の豚たち、ペチャペチャクチャクチャ私に理解できない言葉でお喋りだ。静かにしないとソーセージにして食ってしまうぞ、そう叫びたかったが仮面が邪魔で上手く話すことができない。仮面、そう私は今大きな豚の仮面を着させられている。まるでサーカスの見せ物だ。ピエロが客に口上を述べ客たちの笑い声が聞こえたらいいよいよ哀れな豚男の登場となるわけだ。幕が上がればそこには紳士淑女の皆様方。あるものは腹を抱えて笑い、またあるものは目を背けるふりをしながらこっちをチラチラ見ている。全くたいしたシャレードだ。

木槌の大きな音が法廷に鳴り響いた。紳士淑女は消え去り豚だけが残った。豚たちのお喋りがおさまると判事の格好の大きな豚が勿体ぶって開廷の宣言をした。何を言っているのか分かりはしなかったが恐らくその類のことを言ったのだろう。続いて私の気が付かぬ間に入廷していた黒ぶち眼鏡の痩せた豚が手に持った書類に目を通しながら何か言っている。眼鏡豚は私の方をチラチラ見ながら大袈裟な身振りを加えて話を続ける。相変わらず私には何を言っているのか分からない。まるで異国の映画でも観ている気分だ。映画なら無声で十分なのに。傍聴席がまたうるさくなってきた、大豚が木槌を打ち鳴らしそれを黙らせる。私の隣の黒豚が汗をぬぐいながら立ち上がった。黒豚は相変わらず落ち着きなく体を動かしながら消え入りそうな声で話し始めた。傍聴席は相変わらずうるさい、だがそれも仕方無いことだ。豚はうるさいものと決まっている。傍聴席の豚たちは私に理解できないことをクチャクチャペチャペチャお喋り、大豚はグチャグチャと音をたててつまみ食い、眼鏡豚は先程から鼾をかきながら居眠り、そして黒豚は困ったような表情で何かぼそぼそと話している。全くとんだシャレードだ。

仮面の中は音がよく響く。傍聴席のペチャクチャ、大豚のグチャグチャ、眼鏡豚の鼾、黒豚のぼそぼそ、そして私の荒い息と狂った時計の音。仮面の中でそれらは一つの旋律を形作っていく。その旋律は大バツハの曲、それも、マタイ受難曲ではなくあの協奏曲のものだった。旋律が仮面の中に大音量で鳴り響く。私は ゆっくりと目を閉じる。目を閉じた先には音だけの世界が広がっている。そこでは鮮やかな赤や白に塗られた音符たちがいきいきと跳ね回っていた。音符たちは私の周りに集まり楽しげに踊っている。そしてくるくると回り出す。私もそれに合わせてくるくると回ってみる。音符たちはどんどん回る速度を上げていく。私もどんどんどんどん速度を上げていく。そして私たちは回りながらゆっくりと溶け、混じり合っていく。私の体は音符たちに音符たちは私の体に混じっていく。私たちが完全に一つになった時、私は理解するのだ。その時が来る、唐突に。

ブランデンブルグ協奏曲第四番だ。私は大声でそう叫ぼうとした。しかしまたしても仮面に邪魔をされ目的を果たすことはできなかった。

私は今犬にひかれて絞首台に向かっている。絞首台の周りにはもう豚たちが集まっているようだ。豚たちには分からないだろう。私がブランデンブルグ協奏曲 第四番を思い出した事など分からないだろう。いや、豚たちに何かが分かることなど全くない

のだろう。だから仕方無いことなのだ。私がフィリップ王のように豚に殺されるのも、ブランデンブルグ協奏曲第四番に包まれたまま永遠に向かうことも全て仕方無いことなのだ。

絞首台に到着するとようやく私は醜い豚の仮面から解放された。目の前には輪奈結びにされた縄が揺れている。私の気分はまるでゴルゴダのイエスだった。執行吏の醜い豚が私の首に縄を掛ける。まだ縄が緩い気がした。私が執行吏に文句を言おうとした時急に床が消え失せた。私が感じたのは一瞬の浮遊感と顎への激しい衝撃。やはり縄が緩かったようだ、首が変な角度に曲がってしまった。私はヨーヨーのように跳ねながらそんな事を考えていた。しかし、私は幸運だった。最後の最後にあの曲がブランデンブルグ協奏曲第四番だと理解できたのだから。

やがて豚たちは去り私だけが残された。冷たい風が吹く。風に吹かれて私は振り子のように揺れる。いつかどこかで見た風景。どこで見たのかはもう思い出せない。絞首台の階段を誰かがのぼる音がする。ああ、あれは私だ。まだあの曲を理解していない私だ。裁判所に行かなくては理解できないのに私は何をしているの だろう。言っ てやらなくてはいけないそう思った私は私に向かって笑ってこう言っ てやった。馬鹿だね、お前は本当に馬鹿だね、裁判がまだだろう、と言っ て やった。

私はまだ吊されていた。足元では豚たちが腐った私の足を貪っているようだ。豚には勿体ない食事だ。両目は鳥にとられてもうない、何も見えない。私は風に揺れながら考えた。こうしてかつて私だったものは徐々に消えていくのだ。だが、何者も私のこの魂は消すことはできない。そして全てを捨て去ったこの魂は神の下に召されるのだ。なに車は壊れてしまったが、直にバスが来る。それまではゆっくりと待たせてもらおう。ブランデンブルグ協奏曲第四番を聞きながら待たせてもらおう。バッハの調べに包まれながら私は静かに眠りに就く、今度こそ神の下へ行けることを願いながら……。

「あんた、大丈夫かい？ こんな所で寝てると風邪をひくよ」

そんな声で私は意識を取り戻した。初老の男が私を覗き込んでいた。辺りはすっかり暗くなっている。体が寒い。だいぶ長い間眠っていたのか意識がまだはっきりしない、私は何をしていたのだろうか？ そんな思いを抱きながら体を起こす。

その時、私は視界の片隅に何か動く物をとらえた。

バスだ。そうだ私はバスを待っていたのだった。遠ざかって行くバスには『N E D E』の文字。私は慌ててバスを追いかけた。しかし、バスはどんどん遠ざかって行きそして消えた。

ああ、まただ。またN E D Eに行くことができなかった。何故いつも行くことができないのだろう。

「それは仕方無い事だ。神について語るような知恵を持った奴は樂園に住んではいけないのだから」

後ろから男のそんな声が聞こえてくる。

そう、そうかも、しれない。いや、きっとそうなのだろう。

でも、もしかしたら次のバスには乗ることができるかもしれない。

どこからかブランデンブルグ協奏曲第四番が聞こえてくる。

次が駄目でも、そのまた次こそ乗れるかもしれない。だから私は自分自身にこう言い聞かせるのだ。

「神は私を救う」

そう、いつか、きっと神は私を救ってくれるのだ。もう一度ゆっくり呟く。

「神は私を救う」

私は踵を返してバス停に戻ることにした。頭の中ではまだブランデンブルグ協奏曲が鳴り響いている。そこで私は考える。このブランデンブルグ協奏曲は第何番だ？

何も無い部屋

全てが白く塗られた何もない部屋
天に羽撃たく羽はもうない
地の底に張り付けられた体
私は願っている
空飛ぶ豚に気付かれないように
私は願っている
神が私を救ってくれるように

椅子の倒れる音はもうしなかった

E M E V A S D O G

f i n

[戻る](#)